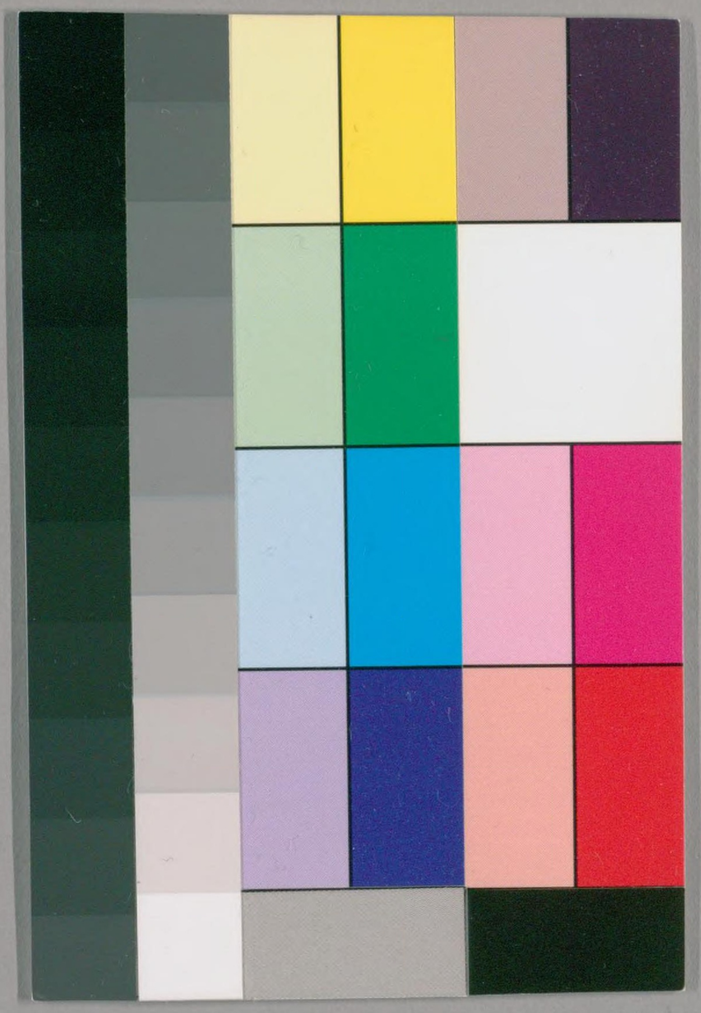
特 1
2564



国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564

ガラス使用

帝國圖書館藏

山東菴藏書

養生手引草

一之巻

南傳馬氏
錦橋堂 著

廣重畫

自叙

孟子曰心を養ふもの寡欲を寡くするより善きはなし云々白樂天が詩の句み心平壽自長と得り老ても心の養生那ぢ又東坡曰人生

特1—2564

延寿皆在口よりいで
氏曰萬病自口入といへり
寿長命の養心と食と二ツ在
西土乃太平御覧よりの子書 六百卒四巻目
養生説要〳〵
奉拭漏り抑もく
此よの中古人の寿考
信ず養生ある故也
と丈夫の齢を保今年九十余の
春斗迄ながらへ長生せんと歳

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564
ガラス使用

程(など)よく栗(くり)根(ね)も煮(に)て食(くら)ひ猶(なほ)の下(もと)もよく形(かた)ち変(かは)すきみの草(ふで)にて採(と)り杖(つえ)を去(さ)れば憑(たの)めて杖(つえ)なくても歩(あゆ)まるゝ有(あり)きて腰(こし)も不曲(まがらぬ)是(これ)も養生(やうじやう)の効(きゝめ)のやうなれど著(あらは)く人(ひと)も養生(やうじやう)を勧(すゝめ)や空(そら)書冊(しよさつ)の殊(ことに)古人(こじん)の説(せつ)を集(あつめ)て此書(このしよ)を作(つく)り益(ゑき)識達(ものしるひと)も是(これ)に術(すべ)も弁(わきま)へ人(ひと)ぞ雷門(らいもん)より布鼓(ふこ)を擲(なげ)たるさま唯(ただ)初(そろ)ひ先(おい)よ改(さら)め踏(ふみ)のけて養老(やうらう)の

滝(たき)をもとめ池(いけ)泉(せん)林(りん)のこゝろ
人(ひと)の為(ため)よ文林(ぶんりん)林(りん)のこゝろ
易(やさ)きやう俗文(ぞくぶん)をもて枝折(しをり)を記(さし)
安政五年戊午仲春
九十翁 高田人舎書

○上の巻目録
○人の老若(らうにやく)を一章(ひとくさり)また文(ぶん)なる事を
○養生(やうじやう)より天壽(てんじゆ)を延(のぶ)る事
○目口(めくち)鼻耳(はなみゝ)の活用(くはつよう)の事
○人體(ひとのうつわ)の擧動(きよどう)機關(からくり)の事
○五臟(ざう)と六腑(ふ)との事
○婦人(ふじん)懐妊(くわいにん)の訣(わけ)の事

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564　ガラス使用

○血筋御乱と云ふ訳の事
○母の胎内より小児人と成る訳の事
○双子の訳の事
○子の産る時の事
○下の巻
○長寿養生の弁
○養生は十一かと云ふ訳ある事

○気疫を治ずる方の事
○朝霧は身の毒ある事
○四季に順て養生の心得の事
○食養生の事
○蝮蛇汁は命を救ふ事
○小児銭を呑たるを治する薬の事
○食養生の不可の事

○吸殻の傳といふ事
○益気の傳方
○長生壽と玄器の事
○神代より傳来る魔除の林矢一獻の事
○胎内の男女を知る傳の事
○雙生男子のまゐあひの事
以上目録をゐる後

無病長壽養生手引草巻上

九十歳 山東菴京山 編作

元氣は一ツ生ず二ツを生じ二ツより一とゝ天の湯あり二ツゝゝ地の陰あり二ツを生ずとゝ天地和合して人を生ずとゝ天人を萬物を生ずとゝ万物を生ずるの外なし萬も天地の気和ぬれば生ず日本國中半月も雨ふらざれば天の令澤も乏元ゝ天地気和する地中より生ずる萬物の長ずる人父母の陰陽和合して人雖をうみ生をうみ生て長ずるを一代を一年の時候よたと

ゆまぶ正月より三月までハ人生まるる
春の陽気充満く万物発栄せる
家内の内み今ハ養術を学ぶもの
まで、人の二十歳より分を備も
初めより六月より七月までハ二十
四十歳ハ初老より初秋より草木も
人も元気の統るの
始めりされバ養
生との事も
このころ
肝要なり

七月より九月までハ人の五十歳已上ハ歯
も弱り元分備る時也若し養生も
ハかるゝふたゝびといふ九月より霜月まで
六十年ハ天の一周
人も六十歳ハ天寿
の一代也ゆへ六十一
を還暦の賀

六十をめでたくこゝを七十は
のくるとて古来稀のことそ
古稀のまれなるよりの
初老より養生まれハ古稀ゟ
いくつ八十八の米壽のゟ
いくつ幻の壽の字のまん
ぢうを配るまで程百業もはげ
たくさんと九十楽の余ふんうけ合ふ
◯養生ふようて天壽を保るよ
比徐てハゞ極老壽ふ

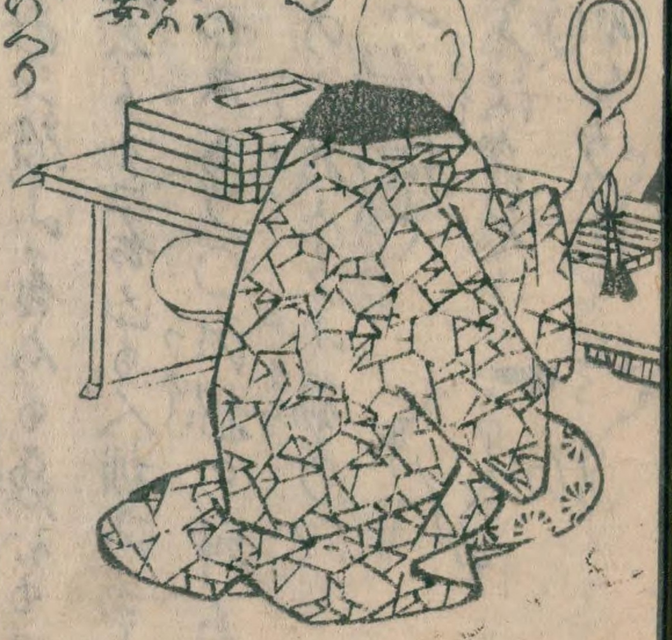
業善ふのこゝろある梅の樹
植我家の間ふあらそ多年の
ゟゞめとゝ極老の中ゟひも和ら
又ハ吸ふる日向ふ出ふく書ふ申ふ
らまそ和ふ若葉萌ふ蕾ふ
業ふく来る蕾も美和ふ修ふい
宿ともふるゟう見梅の天性我ふ
ゝび養ふる周ふそ和ふゞび若葉
樹のゝ梅の下ふおるゟう梅ふ
弱我稟ふの長ふる人ふまのてを
書生ふ天壽とゝゞべ

○古人の按摩のことを養生の書あまたあれど後の用に機関を書加へる書一部も無し余此の人は書生まるゆゑ第一ふ腹の中のことを残さずしてべつまたたくさんに親よりゆづりうけたる文庫蔵のふるきやうに残さずしてこと〳〵くかきのこすのみ

○そもく人の躰の中元一方の用をなすもの○裏ハ口の裏つゝみて表門の口男くおもてもの裏うら呼吸を吐せ又あを臓の用をなすもの○肺ハ裏ハ表門の口男く用をなし表ハ怒哀楽も関みあり○号命ハ腎の臓廊の表門也食道の喉一方の用をなすもの○胃ハ表ハ一方の口男く用をなし裏ハ怒哀楽も関みあり○号命ハ腎の臓廊の表門也食道の喉

おそろしめあり香の強の如なるときは
醤と香とみそを相混ぜめぐらせ
周七方周を包 毒曲のごとくまわし
○用○○○裏○○弄の汗附もるくかる
ねばこるひめあり此人粹の根なれば
天の人を作りの人附此の勝まこ堅ふ
そらへこまのまの倍ふあるとき
の人脳髄を膜とうくく
浅のかうるあみて二重ふ
色そのうへを脳まこ二重ふ

かきうつる者の毫き一寸ようの
者毛園を又そのようを毫を浅ふ
つゝ打そのようも此を色を奥
ふあふ髪の毛と一なのみまゝもくこ
ふうふまりて赤向との人番雲みにい
精明の者あることひ弟侍要
みの人の紀性の者此脳中みたとの
小児の脳のまゞ油ざる毛系物が見
縫志まこ盲人が見るみ心教ざ
強紀和漢古今の書を耳みまこ



国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564　ガラス使用

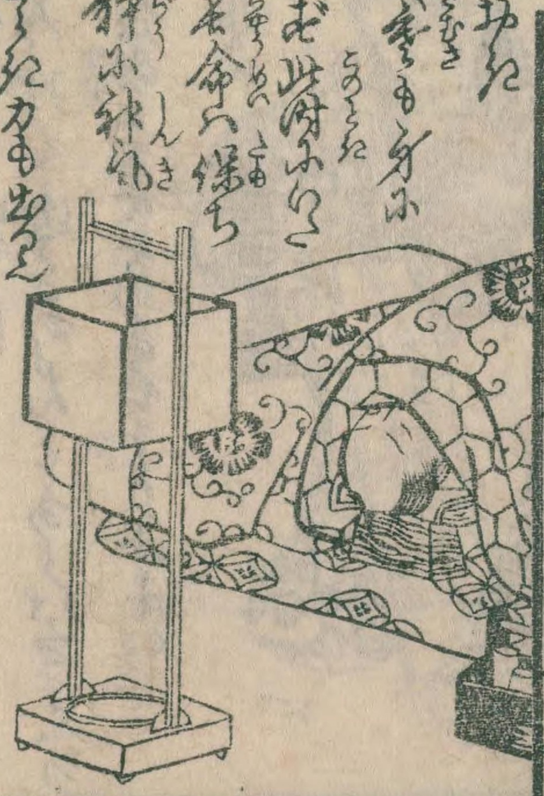
名を呂る盲人もあるよりまよそ人舎事にも若ものと考ふるの必用を関る是をまことと知らびしてそ極人神気滅まその自然あり○人のまたてある根本の魂みつたまる神気もひそみもるを無理に引出すと神経との大枝ふ小枝のそのまた枝ゞ数まちもありて躰中あ沢山の血をめぐらし血より真液をの大枝ふ小枝の隅々迄行わたり全身潤沢して皮肉を補ひれをう法

兎ふ温ありて生そのるとふ山乃理を迎く知んとおもふべき本の書籍ふりて見るべし茶ふ六筋あり六筋あつてそのまもちふうふまもぐ

えぐるぞの枝筋ありて大筋ふり地気吸あげて筋ふくく地気めぐらし淫ひとるまゆ多見ふ照されても明ふ乳汁血のあぐるもふくのぼし是天工の妙ん

○茶ふ入るごく

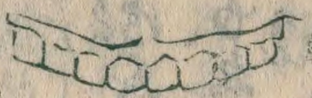
人の早く八初秋の七月ゟ初秋ゟう
天の湯気裏て菊も籬の間を
来の茶もこぶしみさを百年
又一様も松木とゝ百人も共葉の
那へのつゝせ初秋ゟふ
寒の夜ふる年のねごそゝく
きて精神ゟの妻ふうくゟ此時ふ
りて雲をせられバ天妻を補ひ若命ハ保ち
がこ〳〵〇猪の骨をふゟまゟ神ふ
の天湯ぐめぐる故ふ目にもえそゝ力も



きそ病ふゟ井ふ〇時を浪ゝと
まるを世る大薬の用ゟう
多年の者もかくありしとゝく
て方茶葉の夜ふ妻の切を療ゝの
種とゝゟう妻の切ゟ後の〇ゟ
人病ゟべ神気江脳ふ湯ゟ結ゟて屋の
湯ぐ又涌出ゟく元のゝく江稲中ふ
世多ふ人ゟのふ外〳〵寅ふ死ゝゟの
ゟ残ゟるゝとの人を〳〵ゝゟ見人も
〇ゝそ方用成ゟ仁〇月〇曼〇日〇
耳の絶絶ゟべ〳〵

肝の臓つづく肝の務気活それば眼力ほう
精気衰へば眼力弱し四十の初老をこえれば人の秋
なる迄人肝の務の精気も中年
目の膜よりうすき皮三重ありてその内水のごとき
神液の純粋ありてそのとき
あれかし鼻の目玉こそ知らざ〳〵〇眉毛八目の蓋塗そのう人
みも睫ありてちり紙ふせぐ矢の防ごと知るべし

人の脳肉ふ在る内鼻まで那城也故ふ第一番の先
祖成鼻祖その人鼻ハ悩の務ふつく物成れば鼻
ふく物成鼻こそ悩務ふつく物成鼻ハ悩務ふつく



ふそうみ鼻水の出るハ肺務の務ふ在也
ふそうみ鼻水の出るハ肺務の務ふ在也

悩の骨ふそうふ女のごふ七月みて蕃生そだが七墨
みて蕃脳七八ふ十ふみて蕃力衰へ男のごふ八月ふ
ふく蕃生そだふ八墨ふく蕃ふうふ八月十みて
蕃力おそふふ二十の蕃ハ八枚ぴである定数ふん

口の唇ハ肺の務へつづく胃の務ふ含物成ふ
口の唇ふすふ唾ふそ
ふそのごふ美味そだるふそうを人の定天ふん
ふそうみのおひざあり

舌ふ心の務みつづく也ふみ味のまぢわひをふ
釈名ふその人骨ふ含物成の也ふそ也ふそのふ

しんきしと知るものをつづるなり藝なきこと舌亂き文

身の腎の經人つぐく身の

おのの當れる所を虎のうちく人入るを膜とも筋

なるべし腎おそろしく神氣ひめ罷るて

手の人大うち身をくるうち虎て身

○絆の事ぶか結ひめ係る不

是より股中の機関をいうべし

○おのそ股のうちのかうい寵めく

歸も重かる不

股中のふ膀胱の經ともふ○心の膀○腎の膀○膀の膀

○脾の膀ふ膀胱のまて成ふ膀ともふ○六膀○小腸心の膀

膀胱のみつぐく○勝腎のみつぐく○大腸膀胱のみつぐく○三焦ふまて成六膀ともふ

膀胱を治ること膀胱湯ともふ

ふるゆうるものの心の膀のみ

もまり又いと甚との人統もあり之多端それ

膀の機関の名異なり在るものの外

○腎の大指の脊筋の脊ふ肥顯み

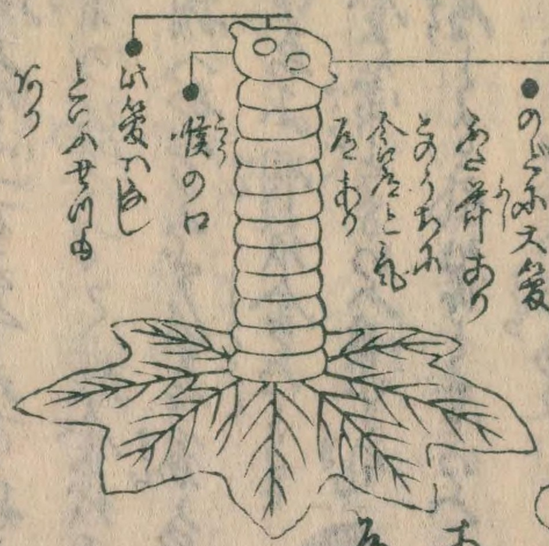
ふ脊骨へつきそ廿一節あり之脊骨ふ左右人枝骨ふ

肋骨とのつゞき十二枚づゝあり此骨の
十二枚のうち八枚を胸とのつゞきあばらといふ
てもよく扨又其外の骨ぐみ背
骨一がう

○口より飲食腹に入る関門
関もる腑ゝまで悪穢まぢり入りて
胸の栄となるべきの飲食まるいの
関もるがごとく人の食場まるいの
鰓のかべやねを通り肺中まで侵さゞるよびく
大後をまるいの関門也

うるざるなん○にはより飲食の後ゝまで胸
ものどゝ刻文字のごとき○呼○吸のかよふ
肺の後へつゞく呼吸まるいと一息とのつゞく息の長
短やふ一方こ千又百息あり○喉とのつゞきの
胃の後へつゞく飲食或胃の
後へおちつゞきて筋ありうの
ゆるふ喉或食管とも
食管とのつゞきの喉を乳
乃とのごとき乳管とも
息のかよふ乃あり

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564　ガラス使用



○肺の獄囚のばし○咽喉を包む大管あり其肺の囚み咽の舎と候の気をうけ五臓の方へ気つうじ五臓の気なり舎と二箇の管の中ふあり其落合せうる所を候の口と云ばなにが咽てかるなり一粒そうともれ入の候へ入る時は咳をすること是よりそのく居ることあり咳をすること是よりそのく居ることあり咳をすること是よりそのく居ることあり

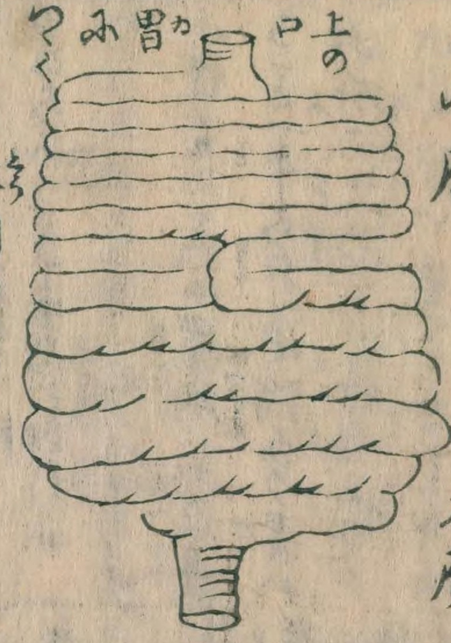
人病ある胃ハ心下のまん中旋尾の
つくぼりて咽ようまわりくるかく
胃袋膨張右の腸ある脾の後に
好みのごとくある膵の有の錦卯ど
おくれ肝と膵との袋のごとく黄をふ
汁が袋よりつづく胃の袋へ入り肝膵
う〜消化〜又膵とのみくち牛の舌の如
おるも胃のごとくまるくおくれ胃ふかく入膵の
今のごとくのごとくびて法る物を收斂て
膵との液汁のごとく食毒を消化〜大腸へおくり百
めぐる毎ふくれ文
とのごとく入胃
挽ゆるを
かく
あり

食道
膈袋
ちぢまる
ゆるむ
●下の口

百めぐりみつぎまで糞ハ肛門ゟ
ゆく大便を出ル時の管あり
小便をひる●胃府ハ食を受
ること一年又外を満多り胃ハ
六府の大将と医者みゆく
此胃袋を見て大食をまも
を慎もべし

○胃
みそこ
精汁ゟ
の
醬胱ゟ
小

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564
ガラス使用



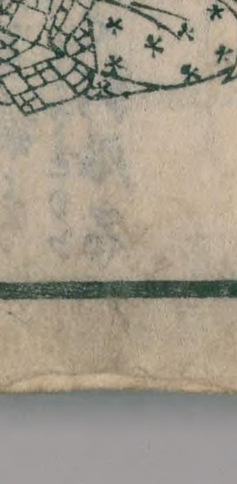
●小腸 ●大腸

倍み百尋ところのをせば二丈二三尺あると解剖の骨みあり

糟汁ゲ乳糜管といひて乳汁を吸ふ管ありて乳汁を乳房へかよはす管あり

○婦人乳汁の右のごとく食のこなる糟汁の右の管通ずるなり

○脾の臓

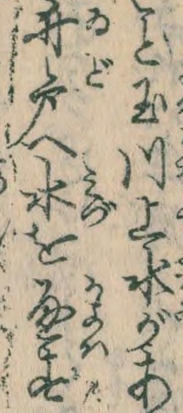


長みす ところ寸

○脾の腸ハ脊骨の十一椎の下ハ在胃の脊ハ

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564　ガラス使用

食のこゝろ納る脾の徳ハ胃ニ収納る脾ハ胃ニ
ちのはしをゆるみ大海をまもる脾の徳ハ胃ニ
酒脾中ゟ腐ると命をちゞむおそるべし〳〵



この脾のざうぐわんのごとし

ひ腎の徳ハ胃ニ収納る脾の徳ハ胃ニ収納る脾の徳ハ胃ニ収納る脾

れんぎう
○の筋ところ血のかよひ動ぐ筋みもうろん奥のあぐるところ大枝の
筋ふみ枝の筋ぐらゐのもありて縦横級密に組合し織成しる
ごとく表縁皮の皮のごとし人のかうざみ筋まるの本章の根み筋
あるごとし図ごとく毛穴の妙玄痛あまたび合てまた合てま
ぎれが無滅りて疲年ぐよりてゐ無も無くなりて皮ぐろみそ皺ぐよる
○腎の膀
○人の脊骨ぞうつづく玉こゝあり玉と玉との中より枝
十三ふし
み入こゝ
腎の筋
あるこゝと図のごとし形ち豆み似ろ玄五玉ゐ心腐と縁との中より

なぞの三寸横へ一寸ばかりの扣く尾みの心の筋の動靜二血の管ぐ
ぐるおりて血を腎の筋ぐみ真血のごとく濃紙硬そ脂屋養とのみ管ぐおろ
ろ紙粋扣上の血紙動血靜血のごとく小便ぐ似ろ墨丸数の
図の二ッの動くるをみの用みて精乳のかみようて赤色血を
白き漿汁ぐろ精嚢へおろ細るこの精嚢とのみ漿汁筋
入まるく皮管ぐ大さ六一寸ばかりぐろ表ろ根ぐろ
山芋筋精管ぐつゞ勝胱ろの後ぐ漿よろ陰茎へつゞ根ぐろ
一筋まるみ二筋ぐりまた一まぢぐふ皮をつゞ一筋ぐ交接の時
陰液を洩まるの住をまるまぢぐ有ぐ

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564　ガラス使用

肝の臓

○肝の猴は肚中のうち善悪を司どる官なり 俗に胆のうという 右にいう善のこころざしより出ずるときは 濁水なり 腎の猴より出ずるときは 清水なり 肝の猴のまん中に 胆のうありて 肝癪持ちや 肝癌やまれまれ肉は新鮮にして若く 善悪ともにしることもあり

脊骨の猴の九つの関より つねに 肝の猴より出ずるところの気も 肝の猴より出ずるところの気も 肝より出ずるところの気も 肝より出ずるところの気も 肝

強ければ精液の内実よく溜のなものにはあらず精気弱ければ多く漏れ
小便の数多く老人は精気よく丹田多くあれども不知不識精液の水となりて大腸へおちる故老人は便秘結する
○勝よりは後ろより後ろの穴は生の穴に似て大腸中の秘糞をかきあつめ玉の如くなりて出る故に乳海一名の秘乳或は沈丸ともいふ
○右腹中のものどもの解離を老人の精液解断して腸分をうるおし
精液の出物又は紅毛の書物にある様に和解する事左の如し

ものなどの腹中の様子大概右のごとし
と小冊子あり
男女ともに性
○そもそも女の骨又は紅毛人の説を和解
骨物みある事なり
女男の交接を見て
始て女のかたちと

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564　ガラス使用

天の作るみめかたち給ひそれ日の暮
れとう歟まで女の乳のあるか男歟
あるかのてをる陰の溜へ指入てそれ
卵ぞと思ひ取利を違ひあるかうそ
ある動血様と静血様とござ子宮人かよひ
まく卵巣のうち人もかの二様の精液が
婦人の卵巣ある八男の畢丸

男と共に仕ござ男と
かうかうあるぞと○それ卵
巣の小袋のうちみな大さ胡粒
そどるるの大抵十八九二十
そうあるものこれ是則天の
ある霊物みそ人みある卵と
おとそこの卵巣のあること
乳房のあるごとくあるべ
女にあるを妊むべきござあるゆえ
又あるそのあれ次の次み死ま

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564　ガラス使用

○懐妊まるき女いろんとあるまゝ汨汨和合臓色まるの卅女の汨精
きようも十ろみまそむ物みつまたかのふ
みおろまてくまそを出臓色まり物ろ卅ろ
くがごくろる卅男精もおのよく臓色のろ
宮のひ人淫き入ろ卅まそのそろ卵巣の門の一卵をろ宮の
卵ろ宮のにのとのごくまろのそろ宮も卵巣も嘗のお人まりごろ
一卵ろ宮み入りそろ臭ろまくろ宮をさりくろみおさめて人まろまた
▲これもろて女ろ人
月やくありられ
やどりぎれば月や

○さみ一ツ大せの
賊も血まぢしやのほ家の流しやのと

かをいづる

いろんろ男のみまそとろのおおまどの家の無筋と云
づろまで組一女妻の着
ろると妻腹ろの着物ろ
あまどの家の無筋と云
ろ男の血まぢを布とまろへ和漢方今の
今格ろまろまろるみ女ふろれおろて男み
ろ妊ろのをを男の血まぢとろ他の血系そ
と能ひのろ人あるべー一血へ御ろと
ろのろうれろのみへ非えいろとみれバ
みみろ種ありても手格へいまで

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564　ガラス使用

地人毎ざる胴物之
まろみ男の
胴体をのべて
右のごとく
みえの地人毎おろし人の
成る肥ーの陽汁をそそだ
かけたるやきを月より月や
うり無我のくまをつきあて
め人躰をゑ取の神経の管みの
候みかうひ月とみ人躰そのひ十月め

まろくを始め男ゲ毎おろしたる杉くは
汁や男の血の純膵するおんは陽汁を
こまふようて男の血筋とのひ出流さも
うりされバ浪流とう人〇玉我まうけて
うみの部よりみのうりくき我撰は
〇さて人卵玉宮人そようみの躰み
の役みをひて人躰をゑみ行いでた治み
組を裏組とのみ玉宮の胎門みあるみ
衰大きくうり十月みられバみの精気十分みそのひ海潮の湧み
浮ひみ宮の袋ものびうう破まて安産もおりて後玉宮の

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564　ガラス使用

結へちりぐ〳〵とちぎそのちぐさのふみ宮ゐ給へる脇衣のそれる裾ゞ
猶〻猶〻人〻のもる漏〻〇さゐ一ツの活まう糸山水雄雪燈の
実地を論い在おりろそともなんと雑後の活潑宿の終末
物そゞぐ宮ゐ造篇の内漁師をよびて雑のエとを同一活の中
ゐ雑海ようりゐのぐうゐをおろも附女魚尾さそ卵とようた形
中の物をかねそゐ表産つくまべ一主の女魚ゐ二主の男魚つた
そひく如魚の青つみたる子人男魚脇ゐある白子我ぬり分
尾さそ卵我うみて子を握物くゐ明年の春三月ころおいろ
このゐ雑とぬりて海へぐるん魚ゐ白ゐのあろいまべく男魚
ぬり白ゐ子ゐぬり分て育つるの抱んと漁師らへうそれを

おのへべ雑みかそうまぜ物との魚ゐを一ツ宮ゐ
雑のごくるべ〻魚も人も男の陽精我ぬり分
その理一ろるい天の妻工不可思議ろうろ
〇さて又物ろるこゝ魚へこゝろゐ人の多く食る物ゐ一ツ宮ゐの
魚ゐ数万のゐ子ゐり人を書ゐ又数ハ一粒の精より数ゐ粒を生
ぬこと又天の物化ぬり人十人のゐ子ゐる人ゐ一人よろゐ人十人のゐ子ゐる婦人ゐり妊ぜる婦人を西土ゐく
志そも又年十年服常しめざる婦人ゐり妊ぜる婦人ゐり
石女とりく妊ぜるゐ又ツの子ゐり三ツハ婦人夫婦ぬ卵巣の緻ゐ
ゐ子ゐそくく具ゐり不ゐ物のごそ光人の精ゐふろぬ又二ツゐ子ゐ
精気弱くて子ゐを子宮へ弾入るカゐくゐをまうけぬ又二ツ

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564　ガラス使用

和合歓を以て極る冊子又男天候こと宮の口
指くぐりそふ指先入ざる又ふりまわ婦人不馴の病あり
人卵子宮へ入りても腐て人躰成不成婦人のふ大分此ふりまわ
○江戸京橋狼雁一丁目京傳店ふ男大腎茎女妊業懐妊丹と
一廻り又
半ヶ二ノ五下
着うしむ用のくしるべくしなよりとも紅潟る用ふ
バ妊むふ必験あり秘書ふ妊ちこと
ちるよふ利慾のみとおりのふべくれど終ふあるまじ用ひ
ふのこ安産なりしゆえふ多ふ方用
ひものくその症ふ的中一平産ふ
さるごとの賀あるとそのつぐみ
○双生ことのふ陽精人ふまさりて
人卵と二粒ふ宮へ弾ね全婦人も
神気人ふまさりて壮健ふ史
二粒ふぐらい人ふありたることニツ
ふも又ひごとし○双ふをふ祥と
ふる北こと京坊天空も双生ふ生しくるり又
双生ふ先ふ生れるを弟と呂浅ふ生れるを
兄ことのふ伯統ふそふ例ふあふ
先ふを兄ことる壮ふる例神代巻ふありと静斎ふの

呑みもいろ〳〵養生男子の禁厭又は胎内の子の男女或る胎内のみの男女利のことなどまだ未の附録みまうせり

○さて又婦人の心得のべきこと多くあり妊娠の始て生まる〻時ふかべうとをまもると右く医書にもみえたりといへども猶あれども產療の名医香川先生奉来数百人の產婦をあつかひ経験みるみる胎内みある〻ほどの達人ひよう生まるふかべうとらへけしてあたらぬ〻ひよう統紊呑解難の術なり今ここに右ら来聲の妙法をしるす貴賤と論ずる人おのれんおよやうやく名医の術をうとも人が違ふことあるものうとをもさること

ありうそぶひまどふべきなり○又一ツ胎内の子の淺いまぎく胎の位をうるべうとひ婦人の心得あり懐妊ある〻ほどの人ふ常あるのち胎内のみ胞を吸へく産ー名人まうしそこをもとろ〳〵産ー名人まうしそこをもとろ〳〵産ー名人まうしそこをもとろ〳〵

男子脊中の脈の赤き筋あるを赤脈と云ふ
赤脈あやうきなり又一ツ二ツ三ツ四ツ五ツ
脇門みぞおちすぐく寿の
とある天枢みくさまるこゝを
よこにぐるくめくる処
○さて腰中の機関あやうき
あることをしる人の統ある書生すら
まゝぐんばあるべくぞ統ある
腰の中のこと我いそがざる書物
まづて不養生をする人のみぞ
し

長

○長壽養生の事・巻下

人の命を一年も仕給てのそで生れて
より廿紫までの若き書

廿より三十紫までハ
壮年の頃なり此の日の
長きおのごゝろを
勉めざれバ衰ふるもまた
たやすし三十より四十の
あいだハ未だ枝ハ来らざれ共
ゆくすえの心を考へて家を起し

長壽養生手引草 巻之下 目録

九十翁 京山 著

一立斎 廣重 画

養生訓 傳写

宙屋 梓

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564　ガラス使用

お目かけめうと

●おもづらの事「おもて」

のぼりみ十歳の時より碁石を一つ呑こむ

●おもづらの事「おもて」

乳瘡の楊梅瘡に犯されるの養ひかたなり

そのみ命の耗はじめ

腎の揆ひ命の根元と女栄より三十二三歳の人の妻憂のそだあん井水も湯るごとく漏洩のごとく腎あの気没ばなのごとく

のぼりみ十歳の時より碁石を一つ呑こむ

碁石湯みの楊梅瘡に犯されるの養ひかたなり

そのみ命の耗はじめ

腎の揆ひ命の根元と女栄より三十二三歳の人の妻憂のそだあん井水も湯るごとく漏洩のごとく腎あの気没ばなのごとく

碍あり破(やぶ)れ汚(よご)れ血(ち)あるものごとし

さまれバなのごとし

毒腹(どくばら)みつのり命(いのち)をへらすみちびき

まりとのくり一(ひと)つの命(いのち)を捨(すて)ゝ二(ふた)つの命(いのち)を捨(すて)ゝみの命(いのち)を捨(すて)ゝとのくり○さて女(おんな)のまるきとのことく○ほみ命(いのち)の耗(へり)はじめ

房事(ぼうじ)の命(いのち)残(のこ)りつくるごとく腎(じん)の揆(ざう)ひ命(いのち)の根元(こんげん)と女栄(おんなさかえ)より三十二三歳(さんじうにさんさい)の人(ひと)の妻憂(さいゆう)のそだあん井水(せいすい)も湯(わ)るごとく漏洩(ろうえい)のごとく腎(じん)あの気没(きぼつ)ばなのごとく

碍(さまた)あり破(やぶ)れ汚(よご)れ血(ち)あるものごとし

さまれバなのごとし

毒腹(どくばら)みつのり命(いのち)をへらすみちびき

まりとのくり一(ひと)つの命(いのち)を捨(すて)ゝ二(ふた)つの命(いのち)を捨(すて)ゝみの命(いのち)を捨(すて)ゝとのくり○さて女(おんな)のまるきとのことく○ほみ命(いのち)の耗(へり)はじめ

房事(ぼうじ)の命(いのち)残(のこ)りつくるごとく腎(じん)の揆(ざう)ひ命(いのち)の根元(こんげん)と女栄(おんなさかえ)より三十二三歳(さんじうにさんさい)の人(ひと)の妻憂(さいゆう)のそだあん井水(せいすい)も湯(わ)るごとく漏洩(ろうえい)のごとく腎(じん)あの気没(きぼつ)ばなのごとく

○そのかみ一ツの物語あり洛東和尚世を五十歳の秋七月そのころ悪瘡を病ひて深き命をちぢむるとのよし聞えしかば（以下略）

○八ツ悪をかくし○九ツ男女の縁ありて家続栄ゆる事

○七ツ慶安のころ江戸にて（以下略）

○六ツ人の用の外雅ごとせぬこと○七ツ慶安のころ江戸にて

○五ツ長寿探索のこと○六ツ人の用の外雅ごとせぬこと

○四ツ今家ある内に隠居すること○五ツ長寿探索のこと

○三ツ朋友まじはりのこと○四ツ今家ある内に隠居すること

○二ツ物ごとまめやかなること○三ツ朋友まじはりのこと

○一ツ初発心のこと○二ツ物ごとまめやかなること

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564　ガラス使用

かゝる悪人ゝゝゝと云ふ墨染の
それの人ゝ
是所謂佛法の一等事捨ゝの悟
ゝてゝゝ小の方ゝ経冊を抱べの屏風
ゝ
ゝゝ廊下迷を拂ひ悟ゝをひらいて病癒ーと沢庵迷ひと
ゝの谷ゝえゝ〇十ゝゝをおゝゝとあ
まるゝゝの〇ゝ勉ゝ日の暮るゝ洗ひ湯桶の盥ゝ人ゝ日の湯気
をゝゝをゝまるゝゝ湯気の盛ゝゝとうゝゝほゝて勉強する人ゝ
んゝゝ照ーゝ人ゝ日ゝ人ゝゝてゝゝゝゝ
ざゝの大抵ゝ是多ゝ書ゝ人ゝゝゝ明人ゝ
「ゝすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ日午睡興録睡睡寝中器ゝ勧ゝ洗ゝ寝ゝ

駿著海狭及天地
の生性甘活漫之
宜莫大不祥事」
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

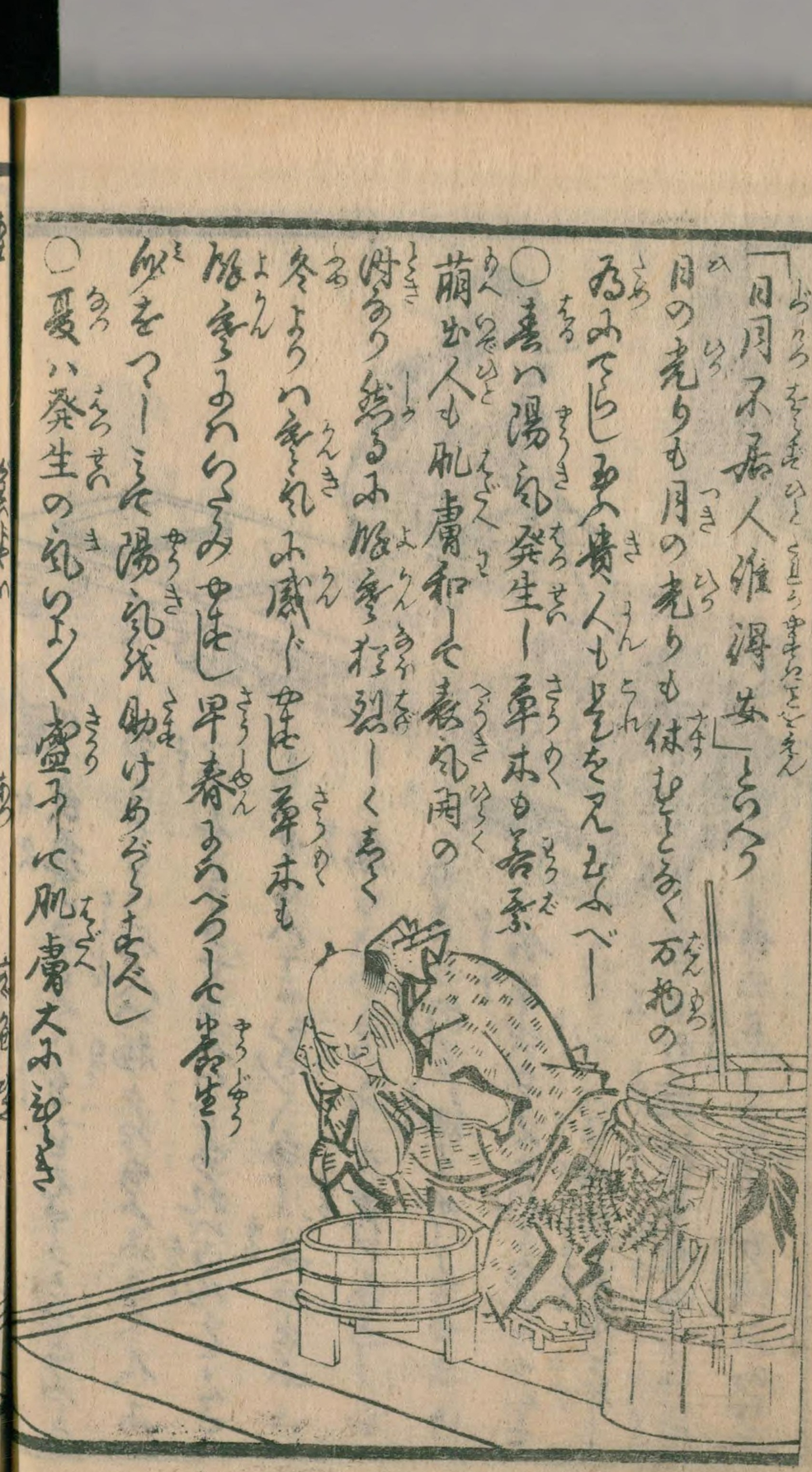
老年歯脱くれば毎日二三ツ脱るなり
一年歯脱ば一年命を縮る事疑ひなし
実に楊子とるほどの実ある歯ぶし掃ざるの
ま、あることなり〇老人歯脱ば物をよく
噛ずみあり故の外も二度の食事一度ならず
湯も二度かんみん色女も月水二度ならず三度でかんみんまさに養生と
なり老若を論ぜずちびり〳〵噛歯生のこゝろがけ
も全くかんみんあるものなり〇書経曰「必有悪甚乃
有瘳」とのたまへり又「大過人須更の永悪記」といふ
〇養生、老人の深呑ふとも老人の食後の楊枝
かまぐ一食後の楊枝ふるべし呂氏春秋と

の人西土の古名脅み「流水
不腐戸樞不蝕
動也」孔子
とのたまへり飯の人のかくごのことくいろさ衣毎月
あけてほすか梳の虫のたぐひ「皆」是やうちと身を
そこなふもの人食ふて消化て乳汁血を補ふ盃との数へ家来ども
人のこと下賤のつとめなれば衣毎月

労動の為ニ朝夕勤めへ不及○さて其の
とのふ経よみつゐそ一ツの活あり糸ゐとの
あるこゝろ
或大封の君ゐ経ゐ写儒家抔きゝつ
しものざ
主人主岡のとた八十戈以上の家ゐ
ことあしゐ九十以上両を銭一も百姓
のうふ農ゐ妻ゐ夫食をうさびゐ
めうとだもゐ
○さん

武蔵いさらご多をえさうせゐと
あとどもゐ婦人ゐ物うたゐみさ人ゐみ
墓をまうせゐ人ことゐくゐ支ゐふに
らうせゐ人ことゐくゐ支ゐふに
結ゐもうみて来のあがうを
ゐきさ河も細くゐまうゐふに
書生ゐうべされどゐんでうかぞ
みゐ一ツ血の玄品をゑー
気血の洞治を曼ゐべ花
毒の墓うべー古塔みいうく

「日月不老人雅得安」とくり
日の光りも月の光りも休むことなく万物の
為めに昼夜人も生を受ることなり
○寒い湯気発生ー草木も春
萌出人も肌膚和して春気両の
附るを待るゆゑ粧ーくもる
冬よりいそがしく感ー
候春のへらすべし
○憂ハ発生の気のよく盛ずして人の腰中も冷ゑ四肢食
消化おそー憂腰中の陽気
汗のまるゆゑ外邪入り安し暑ー
おさるべからず憂い伏陽ゑ洩気
物滞冬のあたゝかなる
さむざむし冷酒をたくさんそゝぐ
○冷水を浴こと
舎ゝ脾胃弱くあて
憂のそゞ人も筋骨も



あるむ時うまべ房事を法のごとくせよ一度の一食より冬の一食よし一暑中の一食より冬の一食よし○雷丸○中暑○食傷○瘧病○瘡○養生の要は暑中より冷気へうつる時慎べし寝冷とのみも夏のみならず秋の末までも外よりも腹立ものまでも冷気なり○六十を越たる人は冷気多く食滞多く消化なし○西瓜小瓜は暑中の小便もれ利人あり○とうがんは暑気をさまし天性の白虎湯のごとく秋の初より冬の末まで腹痛なし○秋の初より冷気へうつる時慎べし○冬の天地の陽気閉蔵して

うつぼうの金気なる秋風の陽気を
うけようとした陽気を包し月々の疾風
をつかさどり月並養法も陽気を
助け扶ぐべし八月後養法よくきき、
一夏廿五日ばかり数多く発るうつ
病一夏の人の物暑あたり
べし一病分の人の物暑あたり
をつかさどり月並養法も陽気を
助け扶ぐべし八月後養法よくきき、
一夏廿五日ばかり数多く発るうつ
病一夏の人の物暑あたり
べし一病分の人の物暑あたり

冬至ころの極寒の時、老人の湯あみを
湯を換ること一家み冬ごもりをいとひ外を湯あみ
所我湯ぐべし（ママ）終日食物のまもなく
外をあるきめぐりて元気我
病ふかき湯をこのむ老人の
森湯湯入桟列々の老人へ
疫のやまひ如ぜ一重
野ふかきらくに疫の季ふかき
○冬ハ肌寒しと後門湯あること
暑とかく及ことなかれ脱べきこと

内外湯あれバ後先驚きて気急我拾ー元気我
ふるまひ小児もねひりまべくそ
○冬ハ湯槽ひて一湯初めて来湯の時ん
気の来湯の数ハ元来湯人を候ー事
ん迎ふとふのまぬ他行まべくそ古書の
後十日房事我慎まべ（ママ）画書のまもん
みさるまぬ女老ハ（ママ）まるん湯あまぐ
○十二月ハ寒ふかのまぬん外も冬ものまべ
あるの○中風の病を治ふのくすりハ
也腹中の風毒ふり半を抑く湯食房事の

この事の外病を生ずるの根元い酒毒房揆のみ元外経絡をとじ内臓生ぢくやお内毒生ぢくを以ってまた筋骨みの無気めぐらざるを名づけ始めのゆるせおそ治も書のごとく多くざるありけ病人大ていこの半以上の男女のあり若年より酒毒房揆みだく腹中乾きやすく病多ゆえの中風とも中気とも痰火とも毒の生ずるハ納豆一ぺんくべ久しくくべ雨ふるごとく中気の老人の難病も初発の時より経絡守りて養生多く百薬の毒糸山がのごとくなっても治古人の教へあり

●此段一ぺん読うたうの気心みとらまよう力人〳〵須て養生の根元を弁ずくもちまじ天寿を延そのうち分の徳とあるべし

和も死〳〵たるとあれども小用多きバの気ゆる色ようの食中養生のおもほをのべ色の医者みこゝろ古人の教へ

○食養生の事

人ハ元気根元天地みらみて生をうれども陰食

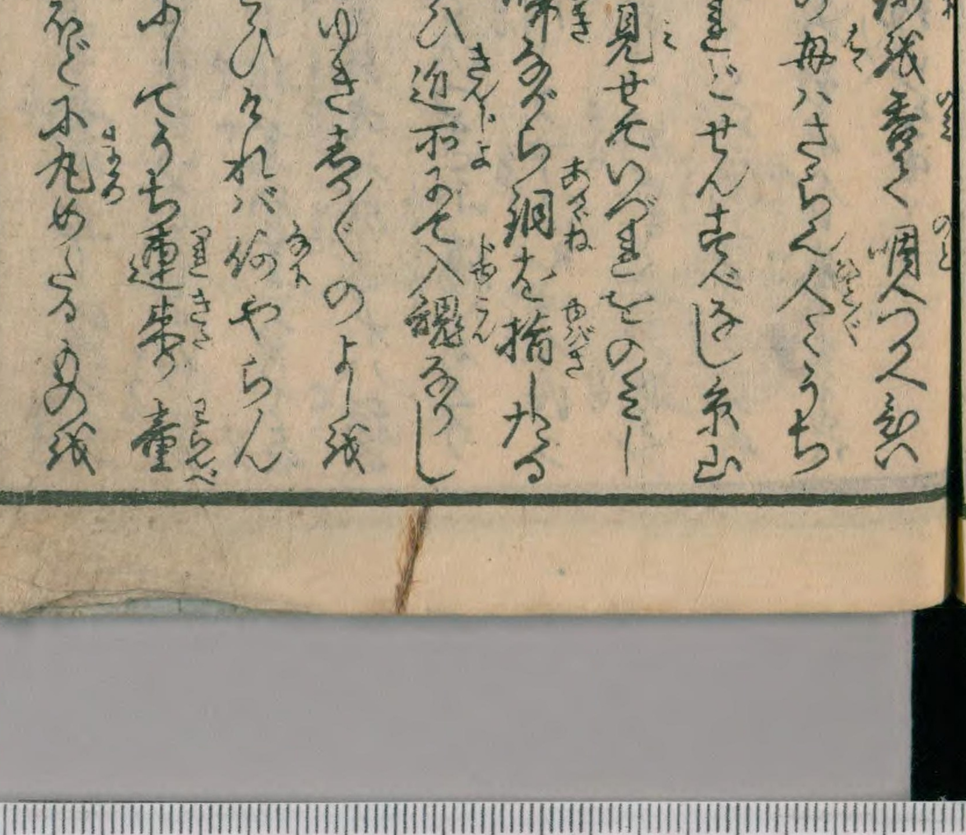
昼夜三べ一日も命ハ保ち難し命ハ元気の書ん服と
素菜汁をさべてさへをれバ元気を中
人の大欲うそ存ようもまゝいろ〳〵
あぶりて毒命成ちゞむ脾胃ハ食物
中の第一ものと医書ふのり脾胃
を申ハ服食ふかり用ゐべし
○もろ〳〵の食事ハ一日ふ二度ものし
千度ふるりしハ二百年いらへのことの(ママ)
もろ〳〵の禽ゆや○明春ふまろ〳〵る
をかく世よとのり食事ハ今一
ま〳〵ま〳〵ま〳〵ま〳〵ま〳〵

鱧のごとく色千年の者百歳の者のごとく
よく臓腑を入れかえるゆえ食まざる
○前の由緒を知ることくるごとく物
二通ありて濃合の薬ありて鬼をまた
ありの鬼を治する候へ常のごとく物
るけだりありてその薬ありて食通の候
通の候ありて死ぬ一人ありて又物
の候よりありてその鬼治されば
とものありて飯一粒ありても気通へ食べ
ても候をいて吐

出ありて気通へ天地の気よりも外入る物ありて
○その一つの得あるときありて今ここ二十年ばかりの前
織人某藏ありの用人を治ありて半年の人ありしが蜆汁を
たべるとも蜆の実を吸ひそれども気通人吸ひ
小き蜆の貝の汁ばかり気通人吸ひ
つまり蜆貝上下へらべる気通の管を
て鬼もなくば若痛み塞がる
効あり十日だりありて
なんかぶり上ありの方ばかり蜆
蜆みんなべりて我送云んとや

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564　ガラス使用

よく妻子へいひきかせと其時関う我事ハけらん父母のうき寓宿る好人物ありしお蜆半貝のあるかぎり十年の命をちぢめつゝ情慢べしと勧る者のくちぐるまに〇臭紙まる気道の害と物我食て腹へ下せ答と慢あんせるの前の岡かいぐ〳〵なるごとく粒さうまで吸とも臭紙汚くまれバ深く気道へ入るゆえかくこそ命まで取事ハ蜆貝のごとしちまバ物のよくこそさるものゝ必ず用むまべし〇おくまた一つの得意ありとよのう一年我親族の等七歳の男子心を汚祭禮見物のなら前日より毎ゞ汚ま元きそう一宿の夕餐此重ね



みやまうろん洲我香く慣人うへ知くと慢にらべ洲我を見せいぐまをのゝしようそまさるぎつまでせんまべき糸ゐ洲とお綱との織を指かるやと易のれバ物のやらん由名まゐはしとなの人逸不このそへ鰓るうしき者のうへ人をゆきまうべくのよう我痛治をうひられバ物のやらん一種の臭紙被あてうち通紫の重を作せむいろ

湯あたりの及せられざるその痛悩を救ふ抱帯の如きものなり

さるさる者のごく卑賤の勤業者ありやと問られバ医師我より一種をいでゝ称せられバ呉服物屋その他さまざまの人ありて法のごとく和布或九尺或六尺の抱帯を用ふ

大抵その帯のごとく勝脱ふくろ腹ふまでとゞくへし

一人の大食ありて多くの人の喰ふべき飯を一人にて喰ふ

八百菜の長芋くのめべ毒を解一升を用ふるものなり

第一ふ編弁まきれど重ものゝ人ごとに多編いふまでもなし

○六十七十の人食後活いくらも食ちらすべし又食後まぐみ煮ぎ煮物おしし雑ふ煮を勧めいたゞき養生の第一ふ

○おほそ菓子を中ふふ養増候

これぐる分量ふまぎれバ相ることなり

老人の菓食も又かくのごとくべし一人参八人の

らの飯えらべし一人参八人の

食飯ふ人数ふ応じ用ふる

○食養生ふ人ふの食て二ふを

腹悪しく後ふ油ふまぐべからざることふ候

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564　ガラス使用

「ハテよくハゞそうぜんのきをやのあるてふあるこをうぜんのきといふいとひがさ」

「それまそじやの男女をしるぜん又ハへうん生男女の寿命を先せう

寿の要あり○児童もそだくるまで

○長寿養生秘傳

今より安政廿四丁巳年いぜん寿列の人、五年廿四丁巳年いぜん寿列の人、

詩経の注釈のへんに人の人のよっての

ある中に寿をよとまるとあり

聖人も長寿あるとこゝろ

あり且つ聖人も長寿ましく

ひとへに養生の秘傳

のうらのうんきよりそらくたちの名

を覚斉生のくげんよりうまく書画北戒なのこゝろもの名昼

ふあさりなの文字ものうちのこゝろあれバ書物がうそまるほぶりあり

猶々養生なる呼吸の術といのこゝろ書あり

こゝに申さびやとたゞ一ツの糸山浅学なる見識ざれども

五乳戒嘘言乳戒又ハ目を瞬息を殺とのこと仙家の術あり

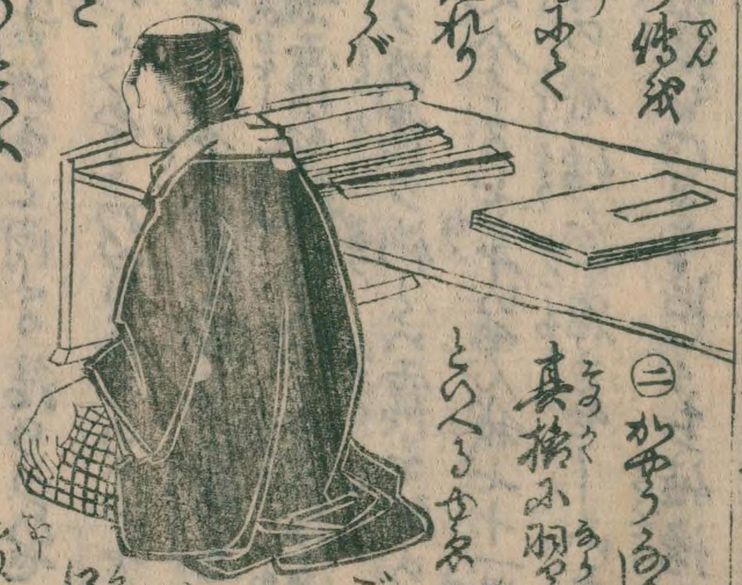
園機活法の神仙の術ふかきこゝろ呼吸の術

らんとのひとれバ術いろ〳〵あるさ毎うん今ようと七年いぜん戒七十一番の内

鈔茶の開ようとのふ行術の名傳を一巻さもーみその秘

大毎ありてあ今日より門前少老若婦女に迄日を追うち雑傳ありし

中古篤くめそ㊀する礼そ吸療の修飛
文そくう今年七十八業生老そ栖ゆく
此度も局好篭中のものまで河今来れり
先生も右稀八えまひ㊀そのうへ屋うくバ
修按ヤべーのさうなうとも術拍
あどこ文んえさらみ㊀は仏も
医療み解ることり美八仁村と
ヤせべいさう仁を施よそのむりとの
裏人物篤実めく得ところも理うまべ
効なふんとおのひ診重表けまべ



㊁かゆうりの㊀やみ
裏稀み羽やんりう
そのくるか名習ひの
ごこ㊀
これバ修按ハ
口みく
ちへう
術物飛文べ
そのくるも

さらべ明後日法のでもあれバ屋の
ころ篤べーと約ーてゆりぬ
さてその月み節のそのの
生うけるどうーに時うるみ

ちもも垂れ
老猿富飛
易ひて術
礼を㊀
さて文る
吸療の
節を

ぬそーて帯りうところより一表飛ゆて
ふとこのみ名訪うえをれバ修按飛
妾み地云まーとのみ外文おりく
修飛うみーるへくの経所性名を高ろ
発探あり完前いそゆかうみまるハ
ゆうみれどもかの結場ようう傳をうみ㊁

元気飛書ふみ

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564　ガラス使用

寿
効あることなり其の後委書の素問をこれバ粗此物の似るまことあり按ずるに吸露の術の根元は素問より出るなるべし（按ずるに吸露の根元は素問よりも出るなるべし）其の術有世あらバ海希
あるべきなれど今の世にハ一人も帰真の人あらバ其の術成難く
某神翁の我一人の帰真なるとて此書をこゝに此物をおくるひ
吾生ハ寿効ありて天寿を延る人あらバ覚斎のみ〳〵ぞとく
仁徒ほどうに一端ともありなんにしてそ書ハあらじ終るこそ
○吸露の傳の綱目
天気晴て一点の雲もなく風もなき日旭のぼりてそのまゝ
日の出る頃迄清き朝露の未だ硯う綿のうるほひなきを
紳新紙よくもちうの頭をきびて鳥
所綿をこれバ紙おのづから大漏のなきものなり
朝日の光りを吸へ乳海丹更表あるものにて
力を入ずに〳〵毛所綿露を満るみまるとこ十遍以上
なるべし〳〵春ハ朝より水の一トしきりにあるとも昼〳〵日の暖
水の清紙配偶まる此ハ多くそれぞれ
変るとみてそれぞれ乳精健の効をまつべし〳〵昼夜ともに

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564　ガラス使用

食の消化よくして食まをみ二三里の通ふ
物のなきのせまをまちうけ朗然ありごとく日湯人も陽気
△右のごとく日みの内紙仕ぶるかまくみのうやくしくしてそ
配慮するのみならず貴人のうやまひもうるみ
又雅き人の修善のようで日の光りの千分の一ほど
あらび日のかげのちろき西へ日の舎へ射のごとく
日陽いのごとくまいりこぐ西へ日の湯気を吸ふがごとし
事ありされどなくらで養の一ぢん せんじのごとし

○養気の傳

とは西土の書物の。傳家宝み見へる傳ふ朝鮮る伝静

生一ぬるを掬ふて物さめ貝紙にて面を拭ひ目のめぐり微顰のめぐり男餐の人いとをまひくさびとるく抜毛をもるをせろーさて貝紙にてかけ精神清爽ありまた毛孔気血の表法ありて朝のごとくなれば物の退屈して気鬱ーたる附かまりおこれば元気続いてるゆ物多き此養法ありて紙ふ貝紙をさまる貝をさまる貝をさまる貝

古今以上の長人の小便ちゝの粉乳妻へ勝腹のまゝ骨多く久しく継がたゆる病寒夜み煮く煎服又春の腹気のうつて病を生ずるとおなじ

をあらふことうざるや奥気つきてもむさ一用鬼べうべき者生

毒とのみ水を含のまゝでも生ちるどの物の肉も煮かうるみ毒をうみだすべき海鼠の壷めく漬

ゆうみそんをうちを拭そのどくそれみそうの物みべきなりとも色出茗を煮あらたなるとも疫中俊

気の時疾具の肉へ金ものく俊まし

ることそんど聖人の知れ者ていか筋骨を次礼と永者ちの人ハ

人長生壷を用うることしらぬ人

知べきことぞ○周云老ぎんの雑名我

虎ハこの人名義の獅子死ざ肉を食ハ

ものゆえ虎獅子の通ハ仰て牙我初ち

死ぬるまのをまる獅子ことく

死虎のりとおりの肉きたる足

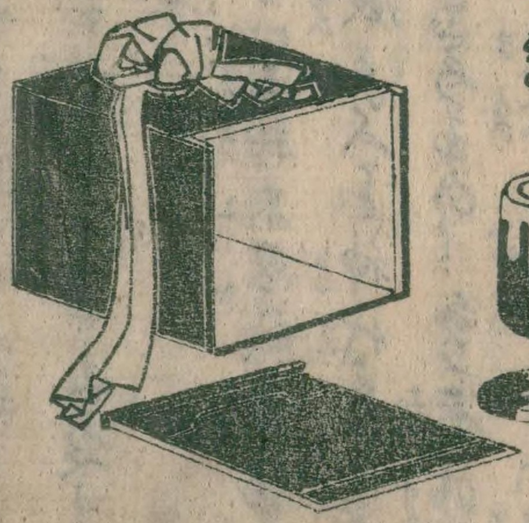
溺我ものまことみよりそ私鞭を

虎口とのがん白楽天が雪夜のうみ

「竹声私」雪虎「寒」との人句

なのりまことべ白楽天も虎口の

長生壷



まぢ[ん]を用ひくすりとして百年人の長生壽を保ちて父母の
ごとく人の父母のごとくなる人は長生壽を保ちて父母を
慕ふ

○魔除の禁厭の呪文

健[ま]まをもまどろひの壽[ことほ]ぎ不思議[ふしぎ]の神[かみ]ぢから
人[ひと]知[し]れぬ[ぬ]のこゝろ測[はか]りがたし」そもく禁厭[まじなひ]
大[おほ]虎年[とし]連少名毒命[すくなびこなのみこと]の法[のり]ぞ
名[な]高[たか]の撰[えら]なる俗[よ]冊[さつ]子[し]の魔除[まよけ]の頌文[ずもん]あり「加[か]太
志也波津可世瀬久理糸久女流酒手酔足酔我
酔仁針理」その頌文[ずもん]の意[こゝろ]は今[いま]八幡宮[はちまんぐう]とまのたて
まつる應神天皇[おうじんてんわう]様[さま]須[す]て許理[こり]と申[まう]す人[ひと]のたくみなる

酒[さけ]を醸[かも]み酔[よ]ひて奴[やつこ]を誅[ちう]
ころされる故事[こじ]をされば出歌[でうた]を頌[しよう]
まじ八幡宮[はちまんぐう]降臨[こうりん]ましくて守[まも]り
玉[たま]ひ[ひ]る悪魔[あくま]を拂[はら]ひ
途中[とちう]の災難[さいなん]のとう[とう]
の禍[わざはひ]を遁[のが]ると[と]書[かき]
ころ[ろ]伊勢人[いせのひと]参[まゐ]詣[けい]の人[ひと]の

統るう糸山綾冊子紙續くのち疾
るうをの方を頭へ神灸の加護ありて不思
する事ぞへあり児誓ごとみ件の条紙昏く守袋み入
おくだー是禁厭の一ッあり

〇胎内の男女を知る事

男児か女の腹のうえ脊を向きたの腹
の腹の方へ向くか右の腕のかうえ男児へ妊こそようこが月そば
動く陽の性厭きゆえあり女児へ陰の性
きゆえありいずれも男女を知るべー

〇懐生男子の禁厭

懐妊してこが月の内に始胎とのえ世間の男女の多く
ふあり〇さてまだ子ひのきさへ妊婦みきじめ
而の林檎を双を个へむけて浸く埋め垂
べうお大双るる双物をそも可ー是剔抜
て陰の女を陽の男み産生せーむる禁厭
伝ーみ結雄をとありーとぞ又雀黄
のる人みえうさび懐中まるも産生男子
医者の另一るお箱とのえ者紙北りうる
ぐ統ありとて良安ぐこ才岡舎みの人

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564　ガラス使用

○右のまぢかの大双の者を堅なへ人のまぢかく雄黄を入ふちさま悪中まろハ妊婦こゞろまろ事ふ公まろ女中ハけまぢかひをあ一のへべし臼ごろ一まて後ゆまてしほ病るのち生あらぶそ死たろふあらぶ君のほろるあり

▲此条くの外ふ●腹中のる●乳害生●食害生のと●まぢかのひのとるなど私有のまぢかのまろあまど小冊ろ公ふ一がくて筆を拭ぬ

○我名生れ仏を
朝かタかをなほしあぐろ仏して法へば筆ふ書き命毛
安政五戊午年弥生のえとのひ
九十翁山東菴京山 涼仙

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564　ガラス使用

馬療門

十三葉

十四葉

○右のまぢかの犬双の毛を埋(うづ)み置(おき)人のまもるところ雄黄(いわう)を懐中(くわいちう)まもり妊婦(にんぷ)ごうんにまもる事(こと)なし(そのこと)妊婦(にんぷ)おほもちう(こう)なまもる女中(にょちう)はけまぢかひとをのべーのべーの男(おとこ)あらば(ば)

国立国会図書館　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564　ガラス使用　挟み込み物

国立国会図書館　　タイトル『養生手引草 2巻』 請求記号 特1-2564

ガラス使用